

## 衝動行為がある患者に対する看護介入の分析

加藤由香<sup>1)</sup> 北川嘉紀<sup>1)</sup> 中島愛乃<sup>2)</sup> 鳥飼礼奈<sup>1)</sup> 榎智子<sup>1)</sup> 河井佑介<sup>1)</sup> 山田成功<sup>1)</sup>

1) 鳥取医療センター6病棟

2) 鳥取医療センター4病棟

### 要旨

統合失調症の患者は幻覚・妄想に苛まれており、感情の起伏が激しく、器物破損や暴力行為等の衝動行為が繰り返される。そして、衝動行為に対しての対応に多くの看護師は苦慮している。今回、同様の症状をもつ C 氏の衝動行為に対する看護介入の現状について、対応している看護師に半構造化面接を実施した。それにより、看護師が衝動行為に対してどのように考えて行動しているのか分析することを目的とした。

そして、「器物破損」に 18 のサブカテゴリー、「自傷行為」に 15 のサブカテゴリー、「暴力」に 19 のサブカテゴリー、「物を投げる」に 24 のサブカテゴリーと、それぞれ共通して「気持ち」「行動」「理由」の 3 つのカテゴリーが抽出された。結果、看護師は患者に恐怖の感情を抱きながら、衝動行為の理由を考え、安全面を考慮しながら対応していることが明らかとなった。鳥取臨床科学 14(1, 2), 73-82, 2025

**Key Word:** 精神科慢性期病棟, 統合失調症, 半構造化面接, 衝動行為

### はじめに

統合失調症の特徴として、思考障害、感情障害、人格障害等があり、症状としては陽性症状、陰性症状、認知機能障害がみられる。その中で、陽性症状として幻覚・妄想があり、暴力等の衝動行為は幻覚・妄想に左右された体験からくるものが多いといわれている。

患者 C 氏 (以下 C 氏) は幻覚・妄想に苛まれており、機嫌良く笑顔で話をしていたかと思えば、急に易怒的になる等、感情の起伏も激しい状態である。そのため、床頭台やチェスト等の器物破損や、他者への暴力行為等の衝動行為に至ることがある。また、過去に境界性パーソナリティ障害の既往があり、自傷行為を度々繰り返していた。怒り、喜び等の感情表出はできるが思考がまとまらず、一生懸命看護師に伝えようとしても他者に伝わるような言語化が難しく、看護師との意思疎通が困難であった。また、声かけに対し黙ってしまったり、拒否も見られているため、衝動行為の減少には繋がっていない。

衝動行為について、遠藤ら<sup>1)</sup>は「看護師からみれば“突然”であるが、強迫観念に伴う不安を取り除く

ための行動や、妄想への対処行動など、患者にはそれなりの理由 (原因) があることがほとんどである。」と述べている。C 氏に衝動行為に至った理由を聞きたくても、支離滅裂な訴えの内容から何を言おうとしているのか看護師が十分に把握しきれず、対応に苦慮している。そのため、衝動行為があった後、C 氏の衝動行為の対応策についてカンファレンスを行ってはいるが、衝動行為に対する効果的な介入方法は見つかっていない現状が続いていた。

そこで、C 氏の衝動行為や支離滅裂な訴えに対する介入方法が看護師により異なっているのはいか、また衝動行為という現象のみに焦点が当てられ、その理由を考えて対応できていないのではないかと感じた。そのため、C 氏に対する看護師側の介入を変えることにより、C 氏の行動や思いの表出に何かしら変化が出てくるのではないかと考えた。

本研究では、C 氏の衝動行為に対して看護師がどのように考え、どのような行動を取っているか、チームの看護師へのインタビューを通して看護介入の現状を明らかにすることを目的とした取り組みを行った。